九州大学学術情報リポジトリ Kyushu University Institutional Repository

中村本『夜寝覚物語』の創作: 改作についての覚え 書き

坂本,信道 ^{九州大学大学院(修士課程)}

https://doi.org/10.15017/11983

出版情報:語文研究. 61, pp.21-28, 1986-06-03. 九州大学国語国文学会

バージョン:

権利関係:

中村本『夜寝覚物語』の創作

―― 改作についての覚え書き –

坂本信

道

書き出しを取り入れたり、書き出しを取り入れたり、書き出しを取り入れたり、書き出しを取り入れたり、書き出しを取り入れたり、書き出しを取り入れたり、

と、『無名草子』『筑波問答』等の評論や、『大鏡』以下の歴史物語に子の中におぼつかなきことどもを言ひ合はせつつ(下三頁)りて、連歌・和歌の会などはなかなかなりとて、古き物語や草すきずきしき人々、東山のほとりにをかしきすまひあるに集ま

作について考えてみることにする。作はあるはずであり、本稿では、中村本を具体的に検討し、その改多い座談会形式を新しく加えたりしている。他にも中村本独自の創

の梗概を対比させると次のようになる。中村本と原作されているが、そこに至るまでの経過は変えてある。中村本と原作めての母娘対面である。この感動的な場面は中村本にもそのまま残めての母娘対面である。この感動的な場面は中村本にもそのまま残の地程と対面する。石山に籠って密かに産み落として以来の、初原作の巻四に於いて、女主人公寝覚上は、美しく成長した我が子、

覚上の兄中納言に相談する。一	自分の邸に迎えようとし、寝	を理由に、主人公は寝覚上を	①石山姫君が恋しがっているの	中村本
		後出の原作のと類似する。)	(原作にはない部分であるが、	原作

関係を疑う。	り。主人公は帝と寝覚上との	⑤寝覚上のもとに帝より文あ ①			石山姫君と対面する。	上は、そこで待ち受けていた	④主人公邸へ退出して来た寝覚 ⑷					(中村本にはない) ②		人公邸に移り住む。	③寝覚上、宮中から退出し、主 ⑦	諾される。	を寝覚上の父入道に提案、承	②主人公は寝覚上を迎えること	示を仰ぐように言う。	また寝覚上自身も、入道の指
	巻四・二七二~二七五頁)	④(原作・中村本ともに同じ。	四・二八五~二九〇頁)	せ、寝覚上と対面させる。(巻	石山姫君を故老関白邸へ渡ら	を承知しないので、仕方なく	④寝覚上が主人公邸へ移ること	(巻四・二七七頁)	が、寝覚上は聞き入れない。	主人公邸に移るように勧める	を理由に、主人公は寝覚上に	⑤石山姫君が恋しがっているの	邸へ戻る。(巻四・二六三頁)	て宮中から退出。亡夫老関白	⑦寝覚上、言い寄る帝から逃れ		新しく作った部分)	(原作には全くない。 中村本が		

するのであり、その後も主人公にはなびこうとせず、主人公と一緒でし、原作では、寝覚上は主人邸に隣接する亡夫老関白の邸に退出だし、原作では、寝覚上の退出③であるが、これは原作の⑦と対応する。たの改作から④へと続く改作について検討してみることにする。の改作から④へと続く改作について検討してみることにする。たまず、寝覚上の退出③であるが、これは原作の⑦と対応する。たたる。の政権のの政権のみである。改作者は、寝覚上と石山姫く、そのほかは内容の改作のみである。改作者は、寝覚上と石山姫く、そのほかは内容の改作のみである。改作者は、寝覚上と石山姫

た改作なのである。

た改作なのであると考えられ、③は中村本の新しい構想に沿っ意図しての改作であると考えられ、③は中村本の新しい構想に沿っていたことがわかる。結婚を原作より早くしたのは、幸福な結末を先を変更した時点で、改作者は既に主人公と寝覚上の結婚を想定しなど、二人が幸福な日々を送っている姿が描かれていて、③の退出など、二人が幸福な日々を送っている姿が描かれていて、③の退出

一六二頁)と、中村本では寝覚上自身の承認も取られていて、懐妊「人目見苦しからぬほどに、入道殿などにも聞こえあはせ給へ」(下とも考えられる部分である。ただし、主人公邸へ移ることについて、はどうであろうか。①は原作⑥と類似する。②が材料になっている)次に、寝覚上を主人公邸に迎えようとする①と父入道への相談②

本で原作と順序が異なっているのは、ここを含めて二箇所しかな

原作と中村本とを比較すると、内容が若干変えられているのもさ

話の順序が入れ替えられていることがわかる。中村

ることながら、

改作であると言えよう。 改作と併せて、内容が自然に続いて破綻のないようにまとめら 物語を幸福な方向へ大きく進める改作であり、前に連なる①② ていないからであり、この点だけを見ても、中村本が結婚③を に一緒に住んでいるのではない。原作では主人公と寝覚上が結 姫君との対面は一時的なもので、中村本のように寝覚上と姫尹 掲の表からもわかるとおり、原作ではもっと後の方にあるのだ ように工夫されているのである。中村本④に対応する原作④は の母娘対面は置かれ、原作とは異なった順で並んでも不自然で 新しい構想に沿った改作であるといえる。これらの改作を受け められ、主人公邸に移り住むという流れになっていくからであ うとする寝覚上は、父入道の許しを得て、晴れて主人公との仲 ③は話の展開上、不自然になることを免れている。宮中を退虫 ②は中村本の創作であり、②の補入により、主人公と寝覚上の ことがわかる。母娘対面④は、寝覚上が主人公邸に移る①と同 のためやむなく広沢から連れ戻される原作と好対照をなしてい こうして見てくると、①②③はいずれも幸福な結末を意図し 改作した④の内容が唐突なものにならないように改作して

=

が、話の順序は大きく入れ替えられている。残されていて、筋の上では何の改変も行なわれていないのである残されていて、筋の上では何の改変も行なわれていないのである。「にうちあける場面がある。この場面は中村本にも詞章を同じくして原作巻五に、主人公が自分と寝覚上との関係を、寝覚上の父入道

しある 一 進する。	くして ⑧司召に、	入入道 二〇六頁)	ことを詫びる。	入道は今	道を石山	れまでの	られた ⑦父入道に	②③の 頁)	回様、は格別で	ている 同喜ぶが	を置い ⑥寝覚上、	た婚し ない。(テ	右が常 を提案す		ио		けて④ る。父入	した、 一④寝覚上の		仲が認 ②寝覚上懐妊	出しよ		いる。中村本
-	⑧司召に、主人公一族揃って昇		びる。(下二〇三~	入道は今まで気付かずにいた	道を石山姫君に対面させる。	れまでの関係をうちあけ、入	⑦父入道に主人公と寝覚上のこ		は格別であった。(下一九九	同喜ぶが、中でも入道の喜び	⑥寝覚上、女児を出産する。一	ない。(下一九七頁)	を提案するが、主人公は認め	励ます。入道は尼にすること	⑤父入道を呼び寄せて寝覚上を	態を心配する。(下一九三頁)	る。父入道もこれを知り、様	④寝覚上の安産の祈りを始め	③尚侍懐妊(下一八九頁)	£任(下一八七頁)		①主人公と寝覚上結婚	4
じ。(巻五・三八五頁)	官位に違いはあるが原作も同			三四〇~三四九頁)	ままが使われている。(巻五・	あるが、詞章も原作のほぼその	原作も同じ。中村本には省略は			八七頁)	寝覚上、男児を出産。(巻五・三				(原作にはない)		作。)	(原作にはない。中村本の創	内容同じ。(巻五・三八二頁)	内容同じ。(巻五・三五五頁)	で、内容も異なる。)	(結婚は巻五・三三九頁以降	原作

頁)	⑩尚侍、若宮を出産。(下二一〇	九頁)	れたことを恥入る。(下二〇 頁)	⑨寝覚上、入道にすべてを知ら│内容ほぼ同じ。
頁)	内容ほぼ同じ。(巻五・三九三		夏	内容ほぼ同じ。(巻五・三五三

ず、⑦の部分の改作は、順序を入れ替えたために話の流れが不自然 るからである。結論から言うと、意図的な改作であるにもかかわら 思われる本文は現存のものより一層良好なものであったと考えられ は、そのような乱れをもつものは一本もないうえ、改作者が見たと あったためと見做すことは無理であろう。 意図しなかったもの、すなわち、改作者が見た原作の本文に乱れが と急ぐ意図はあったと考えられる。⑦以降の順序の変更を改作者が う、内容にはあまり関係のない部分である。むろん、幸福な結末へ もっと後にある部分を前にもってきているが、⑧は官位昇進とい の出産⑩以降、 また原作と同じ順序になる。 途中、 ⑧も原作では 対照表からわかるとおり、 原作と同じ順で進められて来た物語 現存する原作の諸本に

寝覚上の女児出産⑥が起こる点である。 になり、内容に矛盾を生じているのである。 中村本は既に①で主人公と寝覚上が結婚するように改作している 中村本で最も不自然なのは、入道にすべてをうちあける⑦の前 父入道にうちあける場面⑦に至って、突然、前に戻され、尚侍

> ことには不自然な点はなく、ここまでの改作は破綻なく行なわれて からは首肯できるのであり、それに続いて懐妊②・出産⑥を置いた としては当然の結果とも言える。つまり、改作者が主人公と寝覚上 いると言うことができる。 の結婚①を繰り上げたことは、幸福な物語への改作という構想の上 ある。その後に尚侍の懐妊③を続けたことも、 原作を横に置きつつ改作を進めていったと思われる中村本 原作通りの並びであ

また、 関係はそれまで全く秘密にされていたことになっているのである。 とがわかる。つまり、原作と同様に中村本でも、主人公と寝覚上の 略はあるものの、原作の詞章がほとんどそのまま用いられているこ ける場面⑦を続けたためである。長くなるので逐一の引用はしない が、⑦の部分について中村本と原作とを照合すると、中村本には省 中村本が不自然になってしまったのは、 事実を知らされた入道の発言も、 その後に、入道へうちあ

(原作)

さましきに、とばかり物もいはれ給はず。 入道殿、すべてすべて目も口もひとつになる心地し給ひて、 あ

「あはれ、かかりける事どもを夢の中にもわが知らで(後略)」

(巻五・三四三頁)

入道殿聞き給ひてあきれ騒ぎ思すに、とみに御いらへも申し給 (中村本)

はず。ただ、

れている。ところが、これは中村本が前に改作した内容と合わなく 原作も中村本も、 「あはれなりける事を夢にも知らずして(後略)」(下二〇四頁) 入道は二人の関係を初めて知ったように書か

道の許可を得て正式に結婚し①、懐妊する②という順になるからで 懐妊②が、⑦より前にもって来られたことはまだ納得できる。父入 のだから、原作では入道にうちあけて結婚したあとにくる寝覚上の

中村本では、先にも述べたように、入道へうちあける場面⑦よりなっているのである。

で新しく補入された入道の言動は次のようになっている。②では、前に、寝覚上の懐妊②・出産⑥が来るように改作されているが、そこに、オストー・ラー・メート・ラー・オストー・ファー・ファー・ファー・ファー・ファー

「つれなくながらへて、またいかなる目をか見るべき」の広沢の入道殿は、

と、入道は、妊娠に悩む寝覚上の容態を早くから知って心配していと心を尽くし給ふ。(下一九三頁)

るのである。また、⑥では、

どもし給ふ。(下一九九頁)なく喜びあひたるに、入道殿などはあさましきまで喜び・泣きの色々の祈りなどし給ふに、からうじて生まれ給ひぬ。言ふ限り

いことになる。人公と寝覚上の関係をすべてうちあける⑦より前にあるのはおかし人公と寝覚上の関係をすべてうちあける⑦より前にあるのはおかしかに主人公と寝覚上の夫婦関係を認めている。これらの言動は、あきらと、寝覚上の安産を限りなく喜んでいる。これらの言動は、あきら

六○頁以下)。そこで入道は、ることを提案し、入道に申し出るように改作した箇所がある(下一ることを提案し、入道に申し出るように改作した箇所がある(下一ところで、中村本では、先に、主人公が寝覚上を主人公邸に迎え

惜しき事もあるべし(下一六三頁)のずから世の中恨めしく思ひがけぬ事も出で来んは、品下り口のずから世の中恨めしく思ひがけぬ事も出で来んは、品下り口のさやうに(寝覚上ガ主人公ノ所へ)移ろひ給はん事も、人のも

寝覚上の仲が噂されていたからで、その噂どおり主人公のもとへと述べている。世間の評判を気にしているのは、以前から主人公と

で、何の不自然な点もないのである。

で、何の不自然な点もないのである。この部分で、入道は二人移った後の評判を心配しているのであり、ここで与えられた人道の及の関係を知ったと考えられるのであり、ここで与えられた人道の及の関係を知ったと考えられるのであり、ここで与えられた人道の及の関係を知ったと考えられるのである。この部分で、入道は二人移った後の評判を心配しているのである。この部分で、入道は二人

場面の改作に比べて、この箇所の改作はあまりうまく行ってないとなっているのである。本稿の一で述べた石山姫君と寝覚上の対面のに、話の順序・内容に矛盾が生じ、自ら行なった改作と合わなくて来たにもかかわらず、依然、原作のままの詞章を用いているため、それに対して、⑦の記述は、新しい構想に沿った改作を前にもっ

ようにも考えられる。 このような改作の不手際の原因を推定することは困難だが、次の

言うことができる。

には二回あるのである。この類似した二つの場面が、いずれも順序を行な、大きな改作を行なう際に原作の記事の前後を取り違えたこともあったのではないか。本稿の一で触れた改作箇所に、⑦の入道にすべてたのではないか。本稿の一で触れた改作箇所に、⑦の入道にすべてたのではないか。本稿の一で触れた改作箇所に、⑦の入道にすべてたのではないか。本稿の一で触れた改作箇所に、⑦の入道にすべてたのではないか。本稿の一で触れた改作箇所に、⑦の入道にすべてたのではないか。本稿の一で触れた改作箇所に、⑦の入道にすべてたのではないか。本稿の一で触れた改作が激し上げるための中村本は自いたこの場面が、いずれも順序の対面はない。

のである。 のである。

=

ついては永井和子氏が、福息に沿って改作を進めている。このことに福を描くという新しい構想に沿って改作を進めている。このことにやめるという大きな内容の改変を行なって以降は、男女主人公の季も、途中、朱雀院の女一宮を斎院に立たせて主人公への降嫁をとりも、途中、朱雀院の女一宮を斎院に立たせて主人公への降嫁をとり、原作に忠実であった中村本

おきたい。 至って短篇化を志し、従って終末も大団円に終ったものと見て始めは漠然と筆を進めて行ったが、次第に複雑さと長さに思い

察してみることにする。な結末を意図するようになったのであろうか。以下、順を追って考な結末を意図するようになったのであろうか。以下、順を追って考にそのとおりであるが、それではどのあたりから構想を変えて幸福と、中村本の構想が途中で変更されたことを述べておられる。まさ

原作の冒頭では、天人が降り寝覚上に琵琶の秘曲を伝え、寝覚上

の将来について、

宿世のおはするかな。」(四八頁) 「あはれ、あたら人の、いたくものを思ひ、心を乱し給ふべき

相中将にうちあける場面が中村本巻二にある。して語り始められる。その冒頭での天人の予言を、寝覚上が兄の宰でも原作と同様の予言があり、物語は寝覚上の不幸な生涯の物語とと予言を残して帰り、以後の物語はそれに従って進行する。中村本

ふべき人もなし。君ばかりこそと思ふ」とて、ふたとせまでおなり。これ思ふに、この御物思ひ始終あるべくは、何かは「伝おはすと教へけんさへ違はず、またの年と契り給ひけんも確かさやうの天の楽、まさにひがごとあらんや。物思ふべき宿世のさやうの天の楽、まさにひがごとあらんや。物思ふべき宿世の

この宰相中将の心中思惟は、寝覚上の運命が予言どおりになってはして残す手なく伝へ給ふべき。(上一三九頁)

の物語であり、構想も原作のままであると言える。やんでいるもので、この時点では中村本も依然として寝覚上の悲運いるのを確認し、秘曲など伝授してくれなくてもよかったのにと悔

する夢を見る。夢解きを行なわせると、公は再び寝覚上と密会する機会を得た。そこで主人公は将来を暗示物語が進んで、寝覚上が老関白に嫁する日が近くなった頃、主人

ひには御手に得たてまつらせ給ひてん(上一九五頁)ん。ただし、それをよそにや聞き給はんずらん。さりとも、つあめの下、並びなく賢くすぐれ給へる男児ぞいできおはしまさ

な形へ発展する。しかし、原作でもまさこは主人公に引きとられるのまさこにあたる)はやがて主人公の所に引きとられるという幸福と言う。以後、中村本ではこのとおりになり、生まれた男児(原作

は原作のままと考えてよいだろう。ろ、原作にもあったと考える方が妥当である。ここでもまだ、構想から、この夢の部分を中村本独自の改作だとは断定できない。むしから、この夢の部分を中村本独自の改作だとは断定できない。むし

らめ(上二〇一頁)いかがうへに憂きことのははつれども誘ふ風だにあらばこそあいやがうへに憂きことのははつれども誘ふ風だにあらばこそあ場面がある。そこでの寝覚上の和歌は次のようなものである。それに続いて中村本巻二で、寝覚上が我が身の憂さを嘆いている

この歌が『古今集』の小野小町の歌

ているのである。

いる。から、これである。これである。これである。これである。これである。これである。これである。これである。これである。これである。これである。これである。これである。これである。これである。これである

を踏まえていることは疑いがない。小町の歌は、現在のつらい状況を踏まえていることは疑いがない。小町の歌は、現在のつらい状況を踏まえていることは疑いがない。小町の歌は、現在のつらい状況を踏まえていることは疑いがない。小町の歌は、現在のつらい状況を

(『風葉集一雑二)世の中にふれば憂さのみまさりけりいづれの谷に我身捨ててん

近に迫った折の改作である。 が、さらに確実になってくるのは、寝覚上と老関白の婚儀が間想によるものと言えよう。このあたりで構想は変わっていたと思わての和歌の改作は、原作から離れて幸福な結末へと向かう新しい構人公との縁を切ろうとしている。原作と中村本は反対なのであり、長に迫った折の改作である。

- 衣箱に入れながら人にも見せずしておきたり。(上二一七~二を、「かかりとも、もし御契りの朽ちせぬ折もや」とおぼえて、①少将は、大納言殿よりの御装束・御扇、かの形見の御小袖など

福を得た後、つらかった昔を回想する場面があって、そこと対応しと新しい構想が浮かんで来る。中村本巻五に、主人公と寝覚上が幸この部分だけでは構想の変化は窺えないが、後の本文と対照する一八)

給ひし中の御文などは、取り分きて取り出でたれば(下一八三し御装束・扇、また石山にて着かへ給ひし御小袖を返し参らせて取り出づるに、故殿の御もとへ渡し給ひし時、奉り給ひたり少将、また、「それよりの御文ども、みな取りおきて侍る。」と

も、もし御契り朽ちせぬ折もや」と少将に言わせ、形見の品々を捨を変えたために新しく補入された部分なのである。①で、「かかりとはその中には見えないもので、改作者が幸福な結末を意図して構想中村本のこのあたりは、原作の巻四の途中にあたるが、右の部分

方向へと大きく転換するのだが、幸福な結末を意図した新しい構想寝覚上の不幸の原因を取り除いている。これによって物語は幸福な主人公への降嫁をとりやめて斎院に立たせ、原作後半での主人公と本節の冒頭でも触れたように、改作者は中村本巻三で、女一宮の断できるのである。

て周到に準備されたものだと言え、構想は確実に変化していると判のである。こうした対応を見ると、巻二の改作①は後の展開を考えてないようにしておいたのは、この部分で小道具として使うためな

へ変化したのは、それ以前の巻二の後半であったと言うことができ

四

作品として価値のないものだとすることはできないであろう。 た心理描写は削除されている。しかし、それを以って中村本自体を 体として見ると、筋は単純明快になり、原作の特徴である綿々とし ある。順序を改変するにあたっては、改作者は前後を読みこんだ上 中村本だが、個々の改作にはある程度の創意工夫の跡が窺えるので な趣向を加えるなど、よく考えられているのである。もちろん、全 合うように改作するにあたっても、形見の品を小道具に使って劇的 に話が進むように仕立てている。また、主人公と寝覚上が後年巡り で新しい構想に必要な部分を原作から選び出し、創作を加えて自然 に過ぎないと評価され、一個の作品としては軽視されがちであった 本稿では中村本の改作を具体的に見てきた。従来、原作の梗概化

今とりかへばやとていといたきもの今の世に出で来たるやう に、今隠れ蓑といふものをしいだす人の侍れかし。

同様であったと考えられ、本稿で扱った改作や、冒頭部分の座談形 れたのは『無名草子』からも想像に難くない。中村本の改作事情も を改作する点では同じであり、改作物語が新作物語と同様に歓迎さ は質が異なるのは当然である。しかし、享受者の要求に応じて物語 房たちの手にあった時代の改作と、更に時代が降ってからの改作で 吉物語』『とりかへばや』のように、物語の創作と享受が主として女 と『無名草子』に言うごとく、改作は読者の求める所であった。

> 創作としての一面も考えるべきであろう。 式の創作などは、改作者の改作に対する力の入れようを充分示して ての改作を考える上での恰好の資料として、 が見られるようである。中村本については、物語享受の一形態とし て来たように、中村本の後半部分の改作は簡略化という以上のもの 尚に合った作品に仕立てるために原作を切りつめ、幸福な結末へと 極的な改作姿勢が言われている。しかし、そうではなく、時代の好 いるのである。中村本が後半になって改作が甚しくなることについ **積極的に創作を行なっていったのではないだろうか。これまで触れ** 従来は、原作の煩雑を厭って原作を離れ、簡略化したという消 原作を離れて、

注

- (1) 永井和子氏 中村本夜寝覚物語の素材 (「学習院大学文学部研究年 報」第十輯 昭和三十九年二月)
- (2)中村本本文の引用は古典文庫により、数字はページ数をあらわす。
- (4)人物の呼称は、原作と中村本の間に相異があり、また途中で変わる (3)原作本文は日本古典文学大系により、数字はページ数をあらわす。
- (5)現存する原作の諸本にみられる錯簡の影響を中村本は全く受けてい ので、女主人公中の君を寝覚上、主人公権中納言を主人公に統一した。
- (7)永井和子氏 「寝覚」の改作態度について(「学習院国語国文学会誌 (6)この部分は本稿の一で触れたように、中村本が創作した部分である。 六号 昭和三十七年五月
- (8)鈴木|雄氏 神宮文庫本「よはのねざめ」について(「国語」三巻 号昭和二十九年四月)。
- (9)『無名草子』新潮日本古典集成